

慶應義塾大学学術情報リポジトリ  
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	『小夜衣』の親子
Sub Title	
Author	中島, 正二(Nakashima, Shoji)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1990
Jtitle	三田國文 No.13 (1990. 6) ,p.26- 32
JaLC DOI	10.14991/002.19900600-0026
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19900600-0026">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19900600-0026</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 『小夜衣』の親子

中島 正二

1

いわゆる擬古物語の一つ『小夜衣』は、文永八年（一二七一）に成立した物語歌集『風葉和歌集』に歌が採られていないため、その後の成立と考えられている。<sup>(1)</sup>また、『小夜衣』の伝本のうち、前半部分だけからなるいわゆる『異本堤中納言物語』の奥書に貞治三年（一三六四）に校合した由の見えることから、それ以前の成立と考へることができる。<sup>(2)</sup>『小夜衣』の伝本は古いものでも近世初期をさかのぼり得るものはないので、その奥書を疑おうと思えば疑われるが、文体や語彙を見るかぎり鎌倉後期から室町初期の作品として不自然ではなく、積極的にそれを否定する証拠は挙がっていないのが現状である。

以下、論点を明確にする都合上『小夜衣』の概略を述べる。

『小夜衣』の女主人公は按察使の大納言の娘で、幼い時に母をなくし祖母である尼上とともに雲林院で暮らしている。

姫君の父は按察使の大納言と聞え給へるが、この尼上の女なべてならずと聞えしを、忍びて通ひ給ひしほどに、この姫君うみ

おき給ひて、五つばかりの程にうせ給ひにければ、その思ひにさまをかへてこの山里にはすみ給ふなるべし<sup>(3)</sup>

傍線部に「忍びて通ひ給ひし」とあるように、女主人公の母は正妻ではなく、別の箇所にも、北の方から圧迫を受けていたように書かれている。その点は、『源氏物語』の夕顔や紫の上の母に似ている。大納言は、北の方に遠慮して女主人公を引き取らずにいるのである。彼女のことを伝え聞いたこの物語の男主人公兵部卿宮は、宰相の君という女性を介し、彼女のもとに通うようになる。しかし、兵部卿宮の遠出を心配する親心から、彼の両親冷泉院と大宮は、関白の中君との結婚を決める。彼が女主人公を思う気持ちは変わらないのだが、この話を聞いて雲林院の人々は落胆し、尼上は姫君の将来を心配する。一方、按察使の大納言は、北の方の妻の娘の入内が決まり、その準備の忙しさのため、長い間女主人公に会いに来る機会がなかったが、ある事ついでに雲林院を訪れた時、尼上から、彼女を迎えてくれと頼まれ、早速、北の方に打ち明ける。北の方は娘の入内の際の母代をさがしていたところなので、この申し出に賛成する。こうして大納言邸に迎えられた女主人公は、北の方の娘（梅

壺女御)に付き添い宮中に入る。ところが、帝は、梅壺女御よりも女主人公の方に好意を持ち、やがて帝はひそかに思いを女主人公に打ち明けるようになり、彼女はうとましく思う。ある日、御前に参上しない女主人公を呼びに帝自ら彼女の局を訪れるのだが、そこを運悪く梅壺女御の乳母子小弁に見られてしまう。事情を知った北の方は、自分の乳母子民部丞に命じて、誘拐させ監禁させる。民部丞の妻は女主人公に同情するのだが、民部丞は女主人公の美しさに魅せられて、邪心を抱くようになる。

一方、関白の中君と結婚したものの、兵部卿宮は心ひかれず、絶え間がちであり、そのことを嘆くあまりか、中君は病気になる死んでしまう。

さて、民部丞の妻は、彼女のおばが宰相の君に仕えているところから、女主人公を救出する計画をたてる。宰相の君を通じて計画を打ち明けられた按察使の大納言は、民部丞の家を訪れ、そこへ女主人公が民部丞の子供を介して手紙を送り、大納言はそこで初めて事情を知ったふりをして、民部丞を案内させ女主人公を助け出す。大納言はまず彼女を雲林院の尼上のもとに連れて行く。大納言の北の方は居づらくなくて四条に移り、その娘梅壺女御は帝にかまわれなくなり寂しい思いをする。兵部卿宮は宰相の君から事のなりゆきを聞き、雲林院に行き女主人公を院に迎える。女主人公を忘れられない帝は病気になる、讓位し、兵部卿宮は春宮になる。その後は、継子譚の類型通り、兵部卿宮は帝に、女主人公は后になり、子を多くもうけ、娘が春宮女御になる、といった幸福を手に入れ、一方、継母の北の方は人にとまれ零落し、民部丞は法師になる。また、按察使の大納言は大将、大臣、関白と出世し、女主人公の支援者たち

もそれぞれ幸福を手に入れる。梅壺女御は女主人公のはからいで、もとのように梅壺に住むことになる。

以上をごく大まかにまとめると、『小夜衣』は兵部卿宮と女主人公との恋愛譚、継子譚の物語といえるだろう。

ところで、継子譚の物語といえば『落窪物語』『住吉物語』などがあるが、それらとくらべて『小夜衣』の特異な点は、継子(≡女主人公)の救出に男主人公(≡兵部卿宮)が積極的な役割を果たさず、むしろ実父の按察使の大納言が活躍するという点である。だいたい継子譚における実父というのは少し間抜けな役回りであり、例えば、『落窪物語』では、北の方の策略にはまり落窪の君の幽閉を自ら命じてしまうし、『住吉物語』でも、北の方にだまされ、姫君の入内を思いとどまる。また、男主人公が女主人公を救出する点とは男主人公の愛情の深さの強調にもなるはずである。そうすると、『小夜衣』の、実父が継子を救出するという特異さは何を意味するのであろうか。これを問題点の一つ目とする。

女主人公は母親の死後、祖母である尼上に育てられたと先に述べたが、その説明の箇所は次のようにある。

この尼上は三条院の御時、中将の命婦とてみめかたち人にすぐれておはしましたしを、二条わたりに住み給ひし左衛門督と聞えし人のぬすみとり給ひて、かの姫君(女主人公)の母をばまうけ給ひて、ほどなくうせ給ひにけり。

ここでは、尼上が誰の子であるのかといった血筋——とりもなおさず、それは女主人公の血筋でもある——は示されず、尼上が誘拐された女性であり、女主人公の母は誘拐された女性と誘拐した男性との子であり、女主人公はその孫であるということだけが書かれてい

る。言うまでもなく、物語文学において主人公の血筋は極めて重要なのであって、継子譚であっても同様のはずである。例えば、『落窪物語』では女主人公は「わかうどをり腹の君とて母もなき御むすめ」、『住吉物語』では諸本間に異同があるが、だいたい「古き宮腹の御娘（の娘）」または「古き帝の御娘（の娘）」となっていて、いずれも、女主人公の母方の血筋がもともと高貴なものであることが、はっきりと示されている。すると、『小夜衣』の、女主人公の祖母が盗まれた女性であるという設定はどんな意味を持っているのか。これを問題点の二つ目とする。<sup>(4)</sup>

小論は、今あげた二つの問題点の解明を足がかりに、『小夜衣』における人物関係と物語との関わりを考察するものである。

## 2

まず、二番目の問題点、女主人公の祖母が盗まれた女性であるかどうかということなかについて考えてみたい。結論を先に述べれば盗まれた女性ということは、自分本来の庇護者である親（特にここでは父親）から引き離された女性という意味があると思う。

女主人公の家系を考えると、彼女の祖母は盗まれて親から切り離され、盗んだ男——一応は夫——に先立たれた女性であり、その娘つまり女主人公の母は父を持たなかった女性である。さらに、

母にて侍りし人の時（女主人公の母が生きている時）より、北の方のおそろしさは思ひ知り侍りしかば、年ごろ近づく事も侍らず……（大納言邸に女主人公を）わたし聞えしに、今思ひ侍るには、何しよからぬあたりにゆるし侍りけん、今は是さへなげかれて

という、女主人公が行方不明になった際の尼上の悲嘆の言葉からわかるように、女主人公の母は、北の方から圧迫されていて、按察使の大納言の愛情を受けられない状況にあった。つまり、女主人公の祖母、母は夫に恵まれず、父親の庇護を受けられなかった女性なのであり、女主人公に至る三代の女系は夫、父親という男性不在のために不幸な状態にある。女主人公の祖母の特異な経歴はこういった物語の設定を形作るという意味がある。

次に、第一の問題点、幽閉された女主人公を助けるのが、なぜ男主人公兵部卿宮ではなく実父の按察使の大納言なのか、について考えてみたい。これは女主人公が、今述べた不幸な状態から幸福を獲得していく物語の論理に関わっている。前述のような不幸な女性の系図上に位置する女主人公が幸福になる条件として、父親の庇護と理想的な夫が考えられるが、大納言が女主人公にたいして父性を示すとすれば、彼女が兵部卿宮と結婚する前でなければならぬはずである。なぜなら、兵部卿宮は後に、何の障害もなく春宮、帝となっていく人物であり、女主人公も彼の寵愛を一身に受けるのである。女主人公の幸福の進展に大納言の父性が入り込む余地はなくなるからである。そのため、女主人公を救う役を大納言が果たし、その後、兵部卿宮が迎えるという展開になったのだと思う。

ところで、この展開のためには、兵部卿宮が女主人公の救出に加わらない必然性が必要であるが、それは、兵部卿宮の人物造型及び彼と彼の両親との関係に求めることができる。兵部卿宮——概して擬古物語の男主人公にあてはまる——は、『源氏物語』の薫あるいは『狭衣物語』の狭衣のような、世をはかなみ出家遁世にあこがれる人物なのであり、

この世をばかりそめこのみ思し召して、さらに心もとどまらず、菩提の種のみねがはまほしく、山深き住居のみいそがれ給へれば

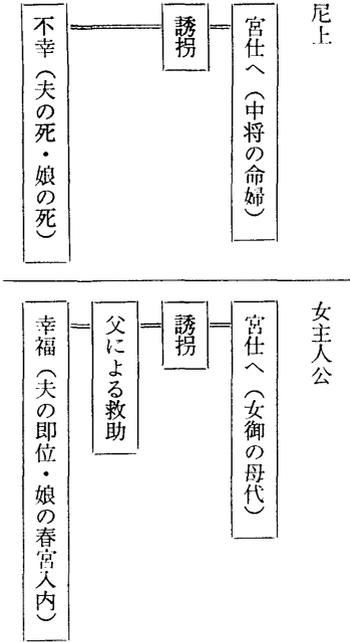
というように描かれている。そして、

この世には、御心とどまる種もがな、と(院、大宮が)仏神にも申し給ふしるしにや、けふまでながらへ給へども、只あやふき事のみ思し召すに、この山里のこと(女主人公)をかく心にかけ給へるも、さるべき事にや

つまり、兵部卿宮が女主人公に思いを寄せるようになったのも、親が仏神に祈った結果ではないかということである。さらに、関白の中君と彼とが結婚するのも、親が彼の都の外への遠出を心配したためであり、また、結婚したものの、中君に合う気のしない彼を親が責めるので、仕方なく関白邸に出かけるのである。先に兵部卿宮は薰型の人物だと述べたが、むしろ薰や狹衣以上に消極的で主体性の

尼上

女主人公



ない人物として描かれている。尻上が按察使の大納言に女主人公を迎えるように頼んだのも、ここに原因があった。

以上、問題点としてあげた、女主人公の系図の設定及び継子を実父が幽閉から助け出す特異さは、結局、親(大納言)と子(女主人公)の関係を描くという点に収斂していくことを述べてきたが、このことは、女主人公と尼上との、境遇の対比によって明確にすることができ。(上図参照)

尼上と女主人公とは、事情は異なるものの、宮仕えをし誘拐される点で一致し、二人の違いは、「父による救助」の有無とその後のなりゆきである。「父による救助」自体は、豊島秀範氏の言うように「恋愛物語が親子の△愛情Vのそれへと移りつつあることを示唆して<sup>6)</sup>」るともいえようが、物語の登場人物の諸相から考えると、別の見方も可能であると思う。次章ではこのことを述べたい。

### 3

前章では親(按察使の大納言)と子(女主人公)のかかわりが物語の軸になっていることを述べたが、脇役たちの説明においても執拗にその親子関係が注意されているのである。いったい、この女主人公の周囲には、両親のいない、または片親の欠けた人物が配置されている。例えば、女主人公と男主人公の仲介をする宰相の君は、(尼上の)姉なる人のむすめなりけるが、母なくなりてのちは、かたみと思ふにや、かくむすびにければ、たがひに浅からず思ひかはしたり。

とある。また、女主人公を幽閉から助け出す民部丞の妻は、幼くて父母にも別れ侍りしかば、おばにて侍る人の、冷泉院の

御内に宰相の君と申し侍る人のもとに、中務と申して侍る、それによしなはれて侍りしを

それから、女主人公の幽閉からの脱出に手を貸す民部丞の子は

我（民部丞の妻）よりさきに侍りけるものの子にてこそ侍れとあって、民部丞の妻にとっては継子になる。

こうして見ると、前述の問題点とあわせて、この物語の趣向としての親子関係という新たな問題が浮かびあがってくる。以下、具体的に見ていく。

(イ) 関白〈実父〉——実子〈中君（↓死）〉

大納言〈実父〉——実子〈女主人公（↓幸福）〉

兵部卿宮の正妻は関白の中君であったが、彼女は病死する。それはちょうど、女主人公が継母のために幽閉されていた間の出来事である。関白は僧を呼んだり馬を奉納したりして中君を救おうとするが、結局は失敗するのであり、要するに、関白は娘を救えなかった父親である。女主人公の父大納言は娘を救えた父親であるから、物語は対照的な親子を二組並べて描いていることになる。



先に述べたように、大納言北の方と女主人公だけでなく、民部丞の妻と彼の子、つまり、女主人公の救出に大きく貢献するこの母子も継母継子である。そして、大納言北の方が継子いじめの結果、零落していったのに対して、民部丞の妻と子は二人とも、女主人公あるいは大納言にとりたてられて幸福を手に入れる。女主人公への関与性の違いが明暗を分けたわけだが、見方を変えれば、対照的な二組の継母継子が描かれているといえる。

また、民部丞の妻と子の継母継子の関係は、民部丞とその子との実の親子関係を浮かびあがらせる。民部丞の妻は、女主人公を幽閉から救い出すにあたって、自分が手引したことを民部丞に知られないようにするために、民部丞の子を仲介に使うのだが、それは、

男にて侍るもの（夫・民部丞）も、おのが子の申し出でたらん事はいかにして侍らんとこそ思ひ侍れ

とあるように、実の子にはひどい仕打ちはしないだろうと思うからであった。実際、民部丞は大納言によって女主人公が救出された後、それを手伝った我が子を、

子にては侍らず、敵にてこそ侍れと憎らしく思うのだが、

この子のにくさ、いふばかりだけれど、さりとて我が子なれば、殺すに及ばず、ただにくみあたり

とあるように、それ以上のことはしない。ここには、継子であったなら殺しかねないという含みがあり、民部丞・妻・子の三人の、継母継子が協力し、実の親が子を憎むという倒錯した構図を強調している。

(ハ) 大納言北の方(↓零落)〈実母〉―(実子)梅壺女御(↓幸福)  
民部丞 (↓零落)〈実父〉―(実子)子(↓幸福)

大納言北の方と民部丞は、継子いじめの結果、零落していく。北の方は、大納言のもとを去り孤立し、実子梅壺女御は、中宮となった女主人公の好意で宮中に迎えられ、もとのように梅壺に住むようになる。一方、民部丞は、法師になり、実子は、大納言にとりたてられる。また、大納言はやがて大将、大臣、関白と出世していき、民部丞の妻も命婦になる。つまり、北の方と民部丞は、自分は孤立し零落して、それと対照的に配偶者と実子は幸福になるという点で一致している。女主人公に邪心を抱く民部丞は、『落窪物語』の典薬助や『住吉物語』の主計助と同様の憎まれ役だといえるが、親子関係をともなうて登場することで、この物語の独自の趣向をよく示している。



大納言の北の方は、継子いじめをしていたことが発覚した後、大納言邸を去り、その後、女主人公と男主人公との仲介をした宰相の君が新しい大納言北の方になる。

大納言もさのみひとりおはしますべきならねば、宰相の君に住みわたり給ひにけり。あらまほしきならひなれば、まして御息

所(女主人公)の御ためにはまことの御母上のやうにぞ思さるる

女主人公にとっては宰相の君は新しい継母にあたるが、「まことの御母上のやう」な継母なのであり、前北の方とは対照的である。仲介役の女房が、特に容貌や教養などが優れていると描かれていたわけでもないのに、関白にまで出世する人物の北の方になるというのは、唐突であり奇妙である。それだけに、女主人公の二人の継母の対照性、あるいは二組の継母継子の関係の対照性を描くという物語の趣向がはつきりと見とれる。

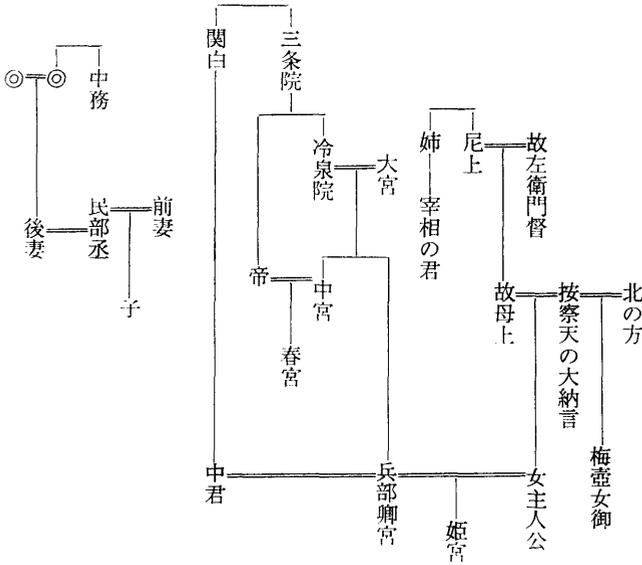
#### 4

以上述べたことをまとめると、『小夜衣』は、継子譚という類型化された枠の中で、作品の存在意義を主張するために、親子関係を描くという趣向を取り入れた作品である、ということである。それは、物語の展開によって、作中人物たちのそれぞれの親子(継母継子・実父母実子)関係の類同性あるいは差異性が表面化するという構造になっている。

ただ、逆の見方をすれば、親子関係を軸に物語が簡素化しているともいえるのであり、もともと女房であった宰相の君が、後に関白になる大納言と結婚すること、中宮にまでなる女主人公の血筋がはつきりしないこと(彼女の祖母がもとは命婦だったことから考えると、中宮になるには不自然な低い血筋だといえる)などとあわせて、平安王朝期の物語からの距離を感じさせる。また、詳述は避けるが、擬古物語には、登場人物の出自がストーリーの進行につれて明らかにされる、あるいは、他の人物たちに知らされていく、とい

う趣向、つまり血筋そのものを中心とした趣向が取り入れられることがよくあるが、『小夜衣』は、そういった展開を採ってはならず、『小夜衣』は、研究史の初期において、先行作品からの影響の指摘

主要登場人物系図



などがなされたものの、作品自体が分析され論ぜられることはほとんどなかった。近年、豊島秀範氏が、表現の特色や主題を論じて『小夜衣』の内容の研究へと導いている。小論は、人物関係に焦点をあてることによって、『小夜衣』という擬古物語が先行作品の影響を受けつつも、いかなる方法でそれら乗り越えようとしたか、独自性を小そうとしたかを考察したものである。

注

- 1 ただし、『小夜衣』の成立を『風葉和歌集』以前とする本位田重美氏の説もある。(『小夜衣』の作者は承明院小宰相か、『古典と民俗』第一号、一九七五年一月)
  - 2 宮内庁書陵部蔵本、無窮会神習文庫蔵本、静嘉堂文庫蔵本等、六本の伝本の奥書に「此一冊大納言為明以本令校合畢 貞治三甲辰二月日」とある(桑原博史氏『中世物語の基礎的研究』一九六九年、風間書房)、『小夜衣』と『異本堤中納言物語』との前後関係については、ほぼ通説となっている『小夜衣』先行説に従う。
  - 3 引用は『小夜衣』(校本)、『古典文庫』による。但し、表記を私に改めた所がある。
  - 4 単に女性が盗まれるというのであれば、物語には、特に擬古物語には珍しいことではない。しかし、『小夜衣』の場合、祖母の経歴以上に女主人公の血筋が明らかにされず、ここにこの物語の特色があると思う訳である。
  - 5 『小夜衣』における『源氏物語』および『狭衣物語』の影響については、後藤丹治氏『異本堤中納言と小夜衣』、『国語と国文学』一九二八年五月)、星野喬氏『小夜衣雑考』、『立命館文学』第一卷第十一号)等に詳しい。
  - 6 「物語の行方——『小夜衣』を中心に——」、『弘学大語文』一九八八年三月)。なお、長谷川信好氏『小夜衣続攷』、『国語国文』一九三六年二月)も、親子の愛情が描かれていることに触れている。
- 〔付記〕小稿は、慶應義塾大学国文学研究会(一九九〇年六月九日)の口頭発表が基になっている。席上御教示を賜った先生方に厚く御礼申し上げます。(なかしま しょうじ)